

2021年度会費納入率が88→89%となっております。会員の皆様には、引き続き会員増と会費納入にご協力をよろしくお願いいたします。

2) 第4期理事・監事候補者選挙について

2022年11月に、2023～24年度理事・監事候補者選挙が終了しました。ご協力に感謝いたします。2023年の総会において承認をいただき、新たな理事会が発足する予定です。

3) 2023年度 定時社員総会

2023年総会は、6月17日(土)の午後に予定しています。5月頃に一齐メールで総会の案内を配信しますので、出欠・委任のご回答をよろしくお願いいたします。

4) 学協会との連携について

学会は、下記のように連携活動を進めています。そのほか、放射線関連の専門学会や専門機関からのお知らせが届き、会員一齐メール配信とともにHPのお知らせ欄に掲載しております。
・日本医療安全調査機構 医療事故調査制度への協力打診があり(放射線看護にかかわる案件において個別調査委員会に検討委員を推薦する)、当学会は協力意思を表明しました(2022年12月29日)。

・ICN NP/APN 14th Conferenceの東京開催に関するサポートレターをICN NP/APN学会誘致委員会に提出しました(2023年2月6日)。

・QST(量子科学技術研究開発機構)の理事長、量子生命・医学部門長宛てに、がん放射線療法看護認定看護師養成課程開設の要望書を提出しました(2023年2月15日)。

3. トピックス

放射線看護専門看護師としての活動と今後の展望

日本医科大学武蔵小杉病院 放射線科
増島ゆかり

鹿児島大学、長崎大学、弘前大学の先生方や多くの皆様からご尽力いただき、2022年2月、日本看護協会より専門看護師の新たな分野として「放射線看護」が認定され、同年12月認定審査を経て3名の放射線看護専門看護師が誕生しました。

私は2015年4月に弘前大学大学院博士前期課程放射線看護高度看護実践コースの1期生として入学し2017年3月に修了しました。修了した2017年当時はまだ日本看護系大学協議会から放射線看護専攻教育課程としても認定されていませんでした。修了から5年、念願かなって「放射線看護」が分野認定されました。

私は放射線科で2013年からIVR看護に携わってまいりました。私が弘前大学大学院に進学したきっかけは、あるスタッフから「結婚することが決まり、双方の両親が放射線科で勤務することに反対しています。放射線科で勤務しても大丈夫でしょうか?」と相談されたことがきっかけでした。自信をもって答えられず悩んでいた時、弘前大学の教員から「放射線看護高度看護実践コース」ができることを聞き進学することにしました。

修了後は放射線科で勤務する医療従事者の放射線被ばく防護に取り組みました。

2011年 International Commission on Radiological Protection(ICRP)は水晶体等線量限度を従来の150mSv/年から20mSv/年へと大幅に引き下げる等という声明を発表し、翌2012年にはICRP勧告を出し注意喚起を行いました¹⁾。2021年4月から国内においても業務

中の被ばく線量の上限値（線量限度）を定める法律が改正され「5年間で100 mSvかつ1年間で最大50 mSv」と変更されています。芳賀ら²⁾は、「IVR従事者の水晶体被ばく量を測定評価した結果、IVR従事者において適切な放射線防護を行わない場合、ICRPの新勧告の水晶体線量限度を超過する危険性があることが明らかになった。」と述べています。当時当院のIVRに従事する医師の中には難しい手技や長時間に渡る手技の際、「集中力がきれる」「細かい部分が見えにくい」といった理由で防護メガネを使用しない場合もありました。ICRPの勧告や先行研究からもIVR従事者がいかに水晶体被ばくの危険にさらされているかは明らかでした。この事実を当院のIVRに従事する医療従事者に周知し、さらには看護部にもIVRに従事する看護師の水晶体被ばく防護を強く訴える必要がある。また、それには当院のIVRに従事する医療従事者の水晶体被ばく量の実態調査が必要だと考えました。当院では被ばく量把握のため男性は胸部（プロテクターの内側）と頸部、女性は腹部（プロテクターの内側）と頸部に装着しています。水晶体の被ばく量は頸部の線量バッジからH1cmとH70 μ mを比較して大きい方を眼の水晶体の等価線量としており眼の近傍での水晶体被ばく量は実測していません。そこで眼の近傍で水晶体被ばく量を測定するため、(株)千代田テクノルの担当者を放射線技師長から紹介してもらい芳賀ら²⁾が使用した水晶体被ばく線量計「DOGIRIS」：ドジリスを貸し出してもらえよう交渉しました。

お借りした水晶体被ばく線量計「DOGIRIS」を装着し、IVRに従事する医療従事者のうち循環器科医師4名、看護師1名の計5名を対象とし、実態を調査しました。結果、医師は水晶体被ばく線量が多く、白内障発生のリスクが高い事が示唆されました。看護師の水晶体被ばく線量は医師の半分程度で、環器IV

R検査・治療の際、介助する看護師は防護板を使用して作業している時間が長いこと水晶体の被ばく線量は比較的少ないという結果でした。一方、透視下で行われる内視鏡的逆行性胆道膵管造影（ERCP：Endoscopic Retrograde cholangiopancreatography）等の介助の際は、看護師も患者の頭側に立ち、防護板なしで患者の身体を支え続けることが多く、血管造影室で一般的なアンダーテーブル型に比べ、被ばく線量が約10倍高くなると報告されている³⁾ことからERCP等透視下で介助する看護師は水晶体被ばく線量が高くなることが予想されました。

以上の結果から、医療従事者同士は確定的影響を回避するため「防護メガネ」の必要性を共通認識するに至りました。また、看護管理者に「IVRに従事する看護師の放射線被ばくの現状」と当院で実施した実態調査の結果を報告した結果、看護部が「放射線防護メガネ」を購入することになりました。

2020年12月には日本放射線看護学会から「看護職のための眼の水晶体の放射線防護ガイドライン」が出されました。ガイドラインを参考に今後も放射線科で従事する看護職の水晶体被ばく線量低減や放射線被ばく防護教育の継続に努めていきたいと考えております。

放射線看護専門看護師は災害看護専門看護師、急性・重症者看護専門看護師、救急看護認定看護師、放射線療法看護をサブスペシャリティとするがん看護専門看護師、がん放射線療法認定看護師の専門分野に隣接していますが、放射線看護専門看護師は放射線事故・災害時においては患者ケアや処置において放射線被ばくの低減や放射線防護、汚染拡大防止、放射線の晩期影響を踏まえた観点に関わることができます。また発災時の緊急対応から中長期に渡り、傷病者や被災住民の被ばくによる人体影響と不安に寄り添い、放射線に関する正しい知識に

基づくリスクコミュニケーションの担い手となりますし、災害支援を行う看護職者等への教育・相談活動などを指導する立場であると考えます。

放射線診療の場においては放射線を用いた診療全般（診断と治療）に関わります。高度・専門分化する放射線診療の拡大に伴い放射線診療を受ける患者は増加し、医療被ばくは増加しています。小児の放射線診療に伴う被ばくの影響に対する不安も高まっています。私たち放射線看護専門看護師はリスクコミュニケーションを通して患者の持つ不安を傾聴し、検査・治療の正当性や影響、安全性、リスクを患者の知識や理解度、価値観などに応じてわかりやすく、過不足なく伝え、よりよい意思決定を支援したいと考えます。

今後の私自身の放射線看護専門看護師としての展望ですが、設置が検討されている NuHAT（原子力災害支援保険チーム）が設置された暁にはぜひ参加させていただきたいと考えております。放射線に対する世間の認識は一般的にリスクを高く感じ、受け入れることが困難な場合が多いと感じます。放射線のリスクに直面した住民の気持ちを「傾聴」し「受容」し「共感」するリスクコミュニケーションできることは我々放射線看護専門看護師の強みだと考えます。

私が勤務する神奈川県には原子力発電所はありませんが、東芝エネルギーシステムズ株式会社原子力技術研究所、株式会社グローバル・ニュークリア・フュエル・ジャパンの2カ所の原子力関連施設があります。日本医科大学武蔵小杉病院は原子力災害医療協力機関及び神奈川県の災害拠点病院に指定されています。今後は放射線看護を学んだ実践者として看護管理者に「院内の日頃の備えに参画したい」との意向を伝え、院内の他の分野の専門・認定看護師と協働して有事に活動できる人材育成が必要で

あると考えます。

最後に、まだ放射線看護専門看護師は医療従事者の間でも認知度が低く、これからわれわれ第1号の放射線看護専門看護師3名は専門的な活動ができる場や立場を確立していく必要があります。次年度以降放射線看護専門看護師が増え、放射線看護専門看護師が広く認知され、放射線看護の質の向上を共に考え実践していけることを心より願っております。今後もなにとぞお力添えいただきますようお願い申し上げます。

引用文献

- 1) ICRP ; ICRP Statement on tissue reactions/early and late effects of radiation in normal tissues and organs-threshold doses for tissue reaction in a radiation protection context, ICRP Publication 118, Ann . ICRP , 41(2/1)2012.
- 2) Haga,Y., Chida,K., Kaga,Y.*et al.* : Occupational eye dose in interventional radiology procedures.Sci Rep, 7(1), 569, 2017.
- 3) 石口恒夫：IVR の被ばくとその対策－放射線科医の立場から－. 日本医学放射線学会雑誌, 62(7) , 356-361, 2002.

4. 各委員会からのお知らせ

1) 学術推進委員会

《委員会概要》

学術推進委員会は一般社団法人日本放射線看護学会の学術推進を目的とした活動として、関連学会及び団体との連携強化に関する活動、ならびに学会および学術集会の活性化・学術推進活動を行っています。

《委員》

委員長：西沢義子

委員：野戸結花、太田勝正、小山内暢、
堀田昇吾

2022年度は次の活動を行いました。

(1)学会および学術集会の活性化・学術推進活動

第11回学術集会において、以下の2つの交流集会を開催しました。

①放射線看護モデルシラバスの活用に向けて
ーモデル授業その3 放射線の健康影響ー

学術推進委員会では、文部科学省が策定した「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」を受け、放射線看護モデルシラバスを1単位版と2コマ版で作成し、2019年4月より本学会ウェブサイト上で公開しています (<http://www.rnsj.jp/guidelines-publications/model-core-curriculum/>)。

当委員会では、モデルシラバスの活用を促進するために、日本放射線看護学会第9回学会学術集会での交流集会から、モデル授業を紹介しています。今年度の第11回学術集会では、「放射線の健康影響」について、放射線生物学が御専門の大分県立看護科学大学・小嶋光明先生にモデル授業を行っていただきました。

モデル授業では、到達目標を提示いただきながら、細胞、DNA、遺伝子や組織反応と確率的影響、さらには放射線のリスクといった放射線による健康影響を理解するためのエッセンスについて説明いただきました。資料だけを見ると、専門的な内容でレベルの高い講義に感じましたが、蛍光顕微鏡写真を用いて、青い核の中で赤く光るDNA損傷の様子を視覚的に供覧されるなど、非常にわかりやすい説明を心がけておられました。対象が看護学生であることを踏まえ、物理、化学、生物といった深い専門知識を基にして放射線影響を理解させるのではなく、放射線被ばくによって人体で何が起るの

かをイメージできるようになることを目標にされているとのことでした。このように、専門的で難しい内容をわかりやすく伝えるための工夫に富んだ講義を拝聴し、限られた時間で放射線看護教育を実践していく上で教育効果を高めるための多くの示唆を得ることができました。

本交流集会には約30名の方に参加いただきました。交流集会後に実施したアンケート(回答数7)では、全員の方が「参考になった」と回答くださり、大変好評でした。また、教育内容に加え、用いている教材を知りたいといった声や、放射線看護の副読本があればよいといった要望もありました。

学術推進委員会では引き続きモデルシラバスの普及に向けて取り組んで参ります。

②放射線看護専門看護師が担う役割とはー「放射線看護キャリア開発グループ」第2回交流集会ー

「放射線看護キャリア開発グループ」は、日本放射線看護学会学術推進委員会の下部組織である「放射線看護専門看護師活動支援ワーキンググループ」から助言をいただきながら活動し、2021年度から本学術集会の交流集会を開催しています。日本放射線看護学会第11回学術集会においても第2回交流集会を企画、開催しました。

2022年2月に日本看護協会より専門看護師の新たな専門看護分野として「放射線看護」が分野特定されました(同年12月に当該分野の専門看護師が3名誕生した)。これを受け、今年度の交流集会のテーマを「放射線看護専門看護師が担う役割とは」とし、放射線看護専門看護師の教育課程(前身の教育課程を含む)修了生3名が、「放射線診断」「放射線治療」「放射線災害」の各領域において、専門看護師の6つの役割(実践・相談・調整・倫理調整・教育・研究)

を実践するために意識した思考過程を踏まえた活動内容を紹介しました。



放射線診断



放射線治療

放射線看護専門看護師の役割		
<実践> 放射線事故・災害分野		
実践	地域	地域
実践	車座、戸別訪問	車座 ・転入 ・転入 ・応 ・転入 ・面時 の放射線不安の有無の把握のため、アンケートを保健師と協同で作成
相談	住民からの個別相談や保健師からの相談への対応	・戸別訪問時(大学)、健康面で気になることを保健師へ情報提供、必要時社協との共有
調整	地元保健師や役場職員、社協との連携・協働	
倫理調整	町での暮らしについて意思決定支援	町外避難者からの相談 子ども夫婦が孫を連れて一時的に町内居住は問題ないか
教育	福島県内外の住民、住民支援者(保健師、町職員、社協職員)	
研究		・Risk perception regarding implementation of iodine thyroid blocking during a nuclear disaster of mothers living near a nuclear power station in Japan. ・Nurses' interest in nuclear disaster medicine: future capacity building

放射線災害

その後、「放射線看護専門看護師」が実践の場において何ができるのかについて、前出の3名より、放射線について学んだ専門家として根拠やエビデンスをもって放射線を受けた患者の健康影響や患者ケアについて発信すること、実際に患者のケアにあたる看護職への継続的な学習の場を提供することの必要性、他の分野の認定・専門看護師との協働や今後の活動のために組織や所属部署に「放射線看護専門看護師」を認知してもらうことの重要性について見解

が述べられました。

本交流集会には計46名の方に参加いただき、このうち8名からアンケートの回答を得ました。回答者のうち7名は本交流集会がやや参考になった・参考になったと回答しました。「放射線看護専門看護師についてイメージできたか」については全員がややできた・できたと回答しました。「放射線看護専門看護師の役割について考えるきっかけになったか、専門看護師が活用できるか」についても回答者全員が役割について考えるきっかけになり、活用できると回答していました。本交流集会が放射線看護専門看護師を周知する場になったと考えます。また、「自施設に専門看護師がいる場合、どのような役割や活動を希望するか(自由記載)」については、「病棟との連携が難しいと感じているので連携の土台を作ってほしい」、「診療での患者・医療者に対する被ばくに関する説明と助言、原子力災害医療の看護職のネットワーク作り等」といった回答がありました。院内外の連携・ネットワーク作り等の役割を専門看護師に期待していることが伺えました。交流集会についての満足度は9割がやや満足・満足と回答しましたが、「放射線看護専門看護師の能力があいまいに感じる、それは専門看護師ではないとできないことなのか」との意見もあり、放射線看護専門看護師の専門性や役割開発について、さらに深める努力や活動内容を広く周知していく必要があると考えられました。今後も交流集会等を通じて、放射線看護を学びたいと志す仲間を増やし、放射線看護の質の向上、さらなる放射線看護の発展のために邁進していく所存です。

(2)「看護職のための眼の水晶体の放射線防護ガイドライン」普及のための活動

本学会では、2021年4月の法令改正に向けて、「看護職の眼の水晶体の放射線防護ガイドライン」を昨年11月に取りまとめて公表しま

した。今年度は普及のための広報活動として、一般社団法人日本看護協会のホームページに掲載を依頼しました。

<https://www.nurse.or.jp/nursing/shuroanzen/safety/harmful/#iguideline>

また、広報用チラシを作成し、広報・渉外委員会との協働で500床以上の病院361施設に郵送しました。

(3)放射線看護専門看護師の活動支援

放射線看護高度看護実践者を教育する教育課程(大学院)の修了生のネットワーク構築支援として、放射線看護キャリア開発グループの活動を支援しています。コアメンバーによる月1回のオンライン会議の開催のほか、1月には第1回の学習会も開催しました。上記交流集会は、本活動支援の一部です。



2) 編集委員会

《委員会概要》

編集委員会は、学会誌の編集と発行を行い、主に学会員皆様の論文投稿から論文掲載までの期間に関わります。また、この一連の作業が円滑に進むように編集システムの環境を整えています。皆様の研究成果や情報、放射線看護

の実践を一早く発信し、社会に貢献できる学会誌を目指していきます。

《委員》

委員長(理事長兼任): 草間朋子

委員: 大石景子、北宮千秋、佐藤美佳、
沼口香織、堀裕子、三森寧子、
吉田浩二

《活動内容》

・学術誌を年に2回(6月末と12月末)発刊しています(web公表)。

現在では、随時投稿から随時掲載までの流れが定着し、約6ヵ月でJ-stageに早期公開されます。

・掲載された論文の中から、年に1回、優秀論文賞を選出しています

・学術集会において、編集委員会企画(優秀論文賞受賞者の表彰式と講演会)を開催しています。

・学会員の論文投稿の支援を行っていきます。

3) 広報・渉外委員会

《委員会概要》

広報・渉外委員会は、日本放射線看護学会の活動を会員の皆様や社会にお知らせし、関連する様々な学術団体等と連携・協働をはかる活動を行っております。

《委員》

委員長: 作田裕美

副委員長: 桜井礼子

委員: 堀田昇吾、新井龍、上野寿子

《活動報告》

2022年度は下記の活動を行いました。

(1) 広報誌(ニュースレター)の発行(年2回発行)

9月と3月に発行しました。9月発行の第10

号ではトピックスとして、看護師と診療放射線技師の資格をお持ちである、湘南鎌倉総合病院放射線科の芦刈久美先生に「看護師が知っておくべき放射線診療事情」と題し、ご執筆いただきました。また、3月発行の第11号では、放射線看護専門看護師の日本医科大学武蔵小杉病院放射線科の増島ゆかり先生に「放射線看護専門看護師としての活動と今後の展望」と題し、ご執筆いただいております。

(2) 学会ホームページの管理・更新

関連団体からの研修案内や研究公募等についてトップページの「お知らせ」に都度情報を掲載いたしました。ガイドライン・刊行物ページの更新、英語版ホームページを更新致しました。

(3) 日本放射線技術学会との協定にそった学術協力の推進

①学術集会企画

第11回学術集会において日本放射線技術学会と共同して行った研究結果をもとに、「放射線防護・安全教育の方向性：今後のあり方・やり方」について、ディスカッションを通して放射線診療におけるより良い看護の姿を展望いたしました。

日時：9月17日(土) 14:10~15:10

テーマ：放射線業務従事者に対する放射線防護・安全教育の方向性—今後のあり方・やり方
登壇者：

【公益社団法人日本放射線技術学会】

九州大学大学院医学研究院保健学部門医用量子線科学分野 教授 藤淵 俊王 先生
東京大学医学部附属病院 放射線部副部長/
診療放射線技師長 岩永 秀幸 先生

【一般社団法人日本放射線看護学会】

東京医療保健大学 立川看護学部 看護学科
講師 堀田 昇吾

大阪公立大学大学院看護学研究科

教授 作田裕美

②共同研究

本学会と日本放射線技術学会の会員に貢献する共同研究を進めています。両学会の学術集会で報告を行わせていただきました。第11回日本放射線看護学会学術集会で報告させていただきました内容は、日本放射線看護学会雑誌 Vol.11 No.1 に掲載される予定です。

4) 国際交流委員会

《概要》

委員会は2015年に発足し、放射線看護学に関わる国内外の動向把握と学会員への情報提供、国内外の関連学術団体との連絡・協力、本学会活動の国際的な情報発信の支援等の活動を行っています。

《委員》

委員長：小西恵美子 副委員長：八代利香
委員：後藤あや、生田優子、加藤知子、
山口拓允

《活動報告》

(1)ICRP-2023 国際シンポジウムについて

第7回 国際放射線防護委員会国際シンポジウム(以下、「ICRP-2023」と略記)が日本では初めて、2023年11月、東京お台場(港区)で開催されます(前号ニュースレター7ページ参照)。

国際放射線防護委員会(ICRP)は、放射線・原子力利用における放射線防護・安全に関する勧告を世界に発信している国際学術組織です。ICRPの委員が一堂に会する本シンポジウムにおいて、放射線防護・安全における看護職の必要性和重要性を国際的に公表することは、日本におけるグッドプラクティスを世界に広める

貴重な機会です。国際交流委員会では、学会理事会の意向を受け、次の4点を発表骨子に、最も効果的な参加方式を検討して参りました。

- ①東京電力福島第一原子力発電所事故(以下、「FI 事故」と略記)後の看護職の経験と学びおよび原子力防災における看護職の役割
- ②看護職への放射線教育、および人々の放射線不安に科学的視点から対応できる看護職の人材育成
- ③看護職の生涯線量把握のための被ばく線量の一元管理の提言
- ④女性の放射線作業員および胎児の放射線防護に対する日本の考え方

ICRP-2023 への参加方式は近く決定の見込みですが、本学会が会員の皆様と力を合わせて行ってきた活動の、世界に誇れる成果を発信していきたいと考えております。今後ともご協力をよろしくお願い致します。

(2)国内原子力人材の国際化に係る活動について

筆者は現在、原子力人材育成ネットワークの国内原子力人材の国際化分科会の運営にかかわっていますので、その活動の概略を紹介いたします。原子力人材育成ネットワークは、2010年11月、今後を担っていく原子力人材を産学官一体となって育成していくことを目的に設立され、2023年現在、内閣府、文科省、経産省、外務省を含む83機関が参加しています(共同事務局:日本原子力研究開発機構、日本原子力産業協会、原子力国際協力センター)。その中で、国内原子力人材の国際化分科会では、参加機関の国際人材育成に係る課題を共有し、課題の解決に向けた産学官連携した研修やイベントを企画開催しています。

国内原子力人材の国際化は、2010年のネッ

トワーク設立当初より、国際社会における日本のプレゼンスを上げるために必要とされていましたが、翌年に起こったF1事故の後、事故から得た教訓を世界と共有し、世界共通の安全基準に反映し、世界の原子力施設の安全確保に貢献するため、日本のことを世界に発信していける国際人材の育成が更に必要となりました。

原子力・放射線分野に限らず、人材流動性の少ない日本企業において、海外に飛び出して活躍したいと思う人は少なく、日本に帰国後のキャリアパスもないなか、国際人材が必要といわれてもそれを一気に増やす手立てはありません。ネットワークではこの10年地道に、日本にいながら若い人材が国際的な場に触れる機会を増やすことを目途に、IAEA 原子力エネルギーマネジメントスクールをはじめとした国際スクールの日本への誘致や、今の福島の状態を英語で説明するスピーキングに力点を置いた研修コースの立ち上げ、実際に海外で活躍するイメージを掴んでもらうために、海外での活動経験を有する諸先輩が講演する Webinar の開催等に、毎年取り組んできました。最初の頃の手探りの実施の段階から、近年では連携も自然となり、また関係機関にも広く知られる活動となり、海外での活躍を希望して参加する若者も増えています。

https://jn-hrd-n.jaea.go.jp/international_hrd.php

研修内容で一番の人気は、違う背景を持つ同世代の若者が集まって、エネルギー・環境問題、福島のことについて考え議論するグループワークです。講義で学んだ知識、施設見学で得られる実体験をベースに、考え方も抱えている課題も異なる研修生同士が、一つの発表資料を作りあげていきます。国も違ってお互いの意見を理解するだけでも大変そうなききもありますが、議論を重ねグループの意見

をまとめていく作業は、研修後も続く人的ネットワーク構築にひと役買っています。実際、研修後も多くの日本人研修生が海外からの研修生と SNS 等で繋がり、情報共有も頻繁に為されているようです。修了生の中に、国際機関や研究機関で活躍する人材も増えてきました。この毎年確実に増えている修了生の数と、修了生でつくる人的ネットワークこそが日本の理解者を増やしてくれると考えますと、運営に携わる者として大変心強く感じます。今後も地道に、日本のことを世界に発信していける人材育成活動に取り組んで参ります。

なお、これまでの原子力人材育成ネットワークの活動には、放射線看護の視点に軸足をおいた活動はありません。今後は、このネットワークでの活動経験を本学会の国際人材の育成に生かし、国際的に発信・交流のできる放射線看護人材の育成に役立つ活動の情報共有、連携イベント開催の可能性についても検討していければと考えております。

(文責 生田優子)

5. 学術集会

日本放射線看護学会第12回学術集会のご案内

日本放射線看護学会第12回学術集会会長
長崎大学大学院医歯薬学総合研究科
准教授 吉田浩二

第12回学術集会を以下の通り開催いたします。

あと5ヶ月、皆様にとって有意義な学術集会となるように準備してまいります。

多くの皆様のご参加を長崎の地で心よりお待ちしております。

《学術集会の概要》

1. 会期

2023年9月9日(土)・10日(日)

2. 会場

長崎大学医学部記念講堂・良順会館(長崎市坂本1-12-4)

3. 学術集会のテーマ

放射線看護の継承と創造～放射線看護専門看護師と描く未来～

4. 演題募集期間(予定)

2023年4月24日(月)～6月30日(金)

5. 事前参加登録期間(予定)

2023年4月24日(月)～7月31日(月)

6. プログラム

【プロローグ】

「原爆被爆者の被爆体験の継承(仮)」

演者 調整中

【会長講演】

「放射線看護の継承と創造～放射線看護専門看護師養成コース1回生として～」

演者 吉田 浩二(長崎大学)

【基調講演】

「日本放射線看護学会の歩みと放射線看護専門看護師への期待」

演者 太田 勝正(東都大学)

【特別講演】

「長崎-チヨルノービル-福島からの教訓」

演者 高村 昇(長崎大学)

【教育講演】 調整中

【放射線看護専門看護師シンポジウム】

テーマ:『放射線看護専門看護師が描く未来』

シンポジスト 調整中

【放射線治療シンポジウム】

テーマ:『頭頸部放射線治療における放射線性皮膚炎ケアへの多職種連携の取り組み』

シンポジスト 調整中

【原子力災害医療シンポジウム】

テーマ:『原子力災害医療の教訓と展望』

シンポジスト 調整中

【ワークショップ】

原子力災害医療関連で調整中

【学会企画】【交流集会】【演題発表（口演・示説）】【ランチョンセミナー】【企業展示】など

7. ホームページ 準備中

8. 大会ポスター

RNSJ The 12th Annual Meeting of the Radiological Nursing Society of Japan (RNSJ2023)

一般社団法人
日本放射線看護学会
第12回学術集会

放射線看護の継承と創造
～放射線看護専門看護師と描く未来～

会期 2023年9月9日(土)、10日(日)

会場 長崎大学 医学部記念講堂・良順会館

会長 吉田浩二 長崎大学生命医科学域保健学系 准教授

プログラム 企画中

大会Web 準備中

課題登録期間 調整中

事前参加登録 調整中

大会事務局
長崎大学医学部保健学科
〒852-8520
長崎市坂本1丁目1-7
FAX: 095-819-7916
TEL: 095-819-7916
Email: RNSJ2023@gmail.com

【編集後記】

次回発刊は、2023年9月を予定しております。

皆様からのご意見や情報提供、ご要望など、事務局にお気軽にお寄せくださいませ。

広報・渉外委員会

作田裕美、桜井礼子、堀田昇吾、
上野寿子、新井龍